

Title	昭和卅九年度夏季見学旅行記
Sub Title	
Author	大久保, 幸作(Okubo, Kosaku)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.1 (1965. 6) ,p.148- 150
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0148

彙 報

昭和卅九年度夏季見学旅行記

六月三十日、伊木、浅子、近山、竹田、森岡、志水の各先生、学

生七十余名の史学科一行は午前八時三十分岡山駅集合、貸切バスで余慶寺を訪れた。本堂は室町末期の大建築で諸伽藍は近世のものであるが整然としており、薬師坐像等は往時の繁栄をしのばせ、京都醍醐寺のそれに似て堂々たる藤原初期の優秀作である。聖観音像は藤原末期の作で一木造りの優雅な姿は印象的であつた。同じく一木造りの十一面観音立像も同時代の作であり、やや損傷が目立つ。元龜二年(一五七一)に明人が豊後国大分郡府中の耶蘇教会堂に寄進した梵鐘があるが余慶寺へ移つた事情は明らかでない。弘法寺では藤末といわれる木造五智如来坐像、足利尊氏御教書等の古文書、その他を見学の後、東寿院で快慶作の阿弥陀如来立像を見学し、次の見学地旧閑谷学校へ向う。

寛文六年(一六六六)岡山藩主池田光政が領内の庶民子弟の教育のために創立したものである。維新後、一時廃止され、また私学として復興するなど変遷を経て現在に至つており、一部に更改の後があるが、聖廟、講堂、小斎、習芸斎、文庫、石塀等の主要部はきわめて良く遺存している。また聖廟の東に接して、光政を祭る芳烈祠(閑谷神社)がある。江戸時代における学校施設の典型として教育

史上貴重な価値を有つ史跡であると共に、その建物は近世建築史上に重要な地位を保つものである。講堂は元禄十四(一七〇一)年それまでの仮講堂を改築したもので備前焼の本瓦葺き、内部は板敷きで四方に花頭窓が開いている、石塀は花崗岩を用い、断面はほぼまばこ形をしており、全長約七十七米もの規模を持つものである。五時過ぎ帰宿。

七月一日 貸切バスにて後楽園へ向う。ここは貞享三年(一六八六)岡山藩主池田綱正によつて創設され、十四年の年月を費し、元禄十三年(一七〇〇)に完成したと伝えられる。初めは茶屋屋敷、後に、後園と呼ばれたが、明治四年(一八七一)後楽園と改称した、中央に三島の池を造つていわゆる廻遊式庭園となつてはいるが、築山の唯心山などには枯山水の岩組の美しさもうかがわれる。奥つた所には、茶畑から梅林が続いて遠く操山の連山が借景にとり入れられて広大な庭園であつた。後楽園で清水先生が合流。後楽園と旭川をへだてて相對して岡山城がある。岡山城は宇喜多秀家が天正の頃十年に近い年月を費し、築城し城下町を經營したことに始まり、小早川氏を経て池田氏に移り、明治維新まで続いたのである。廢城後も鳥城と称して姫路の白鷺城と対照的にその偉容をきそつていたが、昭和廿年の空襲により消失して、本丸には月見櫓だけ残つて、美しい石垣の上に往時をしのばせている。月見櫓は池田氏の統治になつて寛永頃に作られたらしく、石垣もこの部分だけが「のずら積み」から「打込みはぎの扇の勾配」と呼ばれる整然とした積み方になつている。二ノ丸には創建当初に近い西手櫓があるが、これと比べる

と、破風や出窓に変化があつていかにも無事太平の建築物という感が深く、二層には南と東に廻縁をめぐらし、出窓に石落しなど設けられてはいるけれど、一見して月見櫓の名にふさわしい構造である。再びバスにて次の見学地、吉備津神社へ向う、本殿、拜殿、北南隨身門等がある、後光厳天皇の勅命によつて足利三代將軍義満が再興に着手し、前後二十五年を費して応永三十二年（一四二五）に落成したと云われる。本殿の特色である比翼入母屋造りは入母屋造り檜皮葺きの同型屋根を並列させ、中央に縦の一棟で両棟を連結させ、この両棟は千木、堅魚木をあげた構造である。この奇抜な屋根を持つ建物が漆喰固めにした大きな亀腹の上に建っているのは壯観で「吉備津造」の名がある。柱はすべて円柱を用い本殿を囲つて勾欄付の廻縁がつけられ、この縁は挿肘木でささえている。外部の柱間には多く連子窓を用い仏殿建築の様式を加味しているが、内部の構造にはこの時代の新しい手法が数多く用いられている。拜殿は本殿と直結する外観重層の建物で内部は長大な柱が二列に立ち並んで上層の軒桁に連し、上に大虹梁を架して雄大な化粧屋根裏の架構をなしている。上下屋根の間には連子窓を設け、上方からの採光を計つていて、我国の神社建築では異色ある様式である。この他二つの随神門はいずれも、八脚門で、入母屋造りで南のは延文二年（一三五七）の建立といわれ、室町初期の手法を示し、北のは天文十二年（一五四三）の建築と云われる安定した姿の門である。ここで昼食をとる。再びバスで国分尼寺跡へ向う。今は礎石を残すのみとなつているが、地形から想像すると四天王寺式伽藍配置であつたらしく

南大門や金堂の礎は整然と並んで、繁栄のあとをしのぶことができ、国分尼寺にほど近い作山古墳を見学、前方後円墳で長径約三〇メートル、三段に整えられ、各段の境には十センチ間隔に埴輪円筒がめぐらされている状態がうかがえた。備中国分寺見学の後、四時頃、宿泊地倉敷へ入る。

七月二日、今日一日は自由行動、大部分の学生は倉敷三館を見学。大原美術館は明治、大正、昭和三代にわたる近代日本油絵の代表的作品とセザンヌを始め、十九、二十世紀の傑れた西洋絵画を集めており、新館にはエジプト古代美術、陶器類が陳列されてあつた。倉敷民芸館は米倉を利用した白壁かわらぶきの土蔵造りで、無名の民衆が作つた東西古今の焼物、敷物、木工品、竹細工等日常生活に用いられる工芸品三千数百点を蔵している。倉敷考古館は民芸館と同様白壁土蔵造りで、吉備地方を中心とした縄文式、弥生式古墳時代の遺物の石器、土器、石棺、刀剣等が集められ、この外、殷、漢、唐、遼の古代遺物一五〇点を収蔵、陳列してあつた。日本家屋の純粋な建築群と掘割りとが調和して、このあたりは、美しい情趣を保つていた、午後は、三十余名バスを貸切つて鷺羽山へ向う。瀬戸内海へ突出して立つ山で、標高は一三三メートルにすぎないがながめはすばらしく、連日の猛暑も少し忘れれる感があつた。

七月三日、準急「とも一号」にて倉敷より、福山へ向う、貸切バスにて直ちに福山城跡へ行く、福山城は元和五年（一六一九）に水野勝成がつくり同八年に完成した、低い丘陵を利用して築いた平山城で頂部に本丸を置き、南面を大手とし、背部北面を堀切り、裾に

内堀、外堀を設けたものであるがいま外部は、ほとんど跡形なくこわされてしまつていた、本丸や二ノ丸は昔の規模を残していて、この部分の石垣は桃山風の堂々たるものであつた、再びバスで次の見学地明王院へ向う。まず五重塔を見学、室町時代の作で本瓦ぶきで総高三十メートル、純和様の端正なる表現をもつている、心柱は第一重天井上で止まり、初重内部は四天柱をたて仏壇を設けてある。注目すべき点は壁面の極彩色の密画であつて、壁には真言八祖行状図、四天柱には金剛界、三十七尊、側柱には尊王または火焰宝珠を描き、その他長押、天井等には唐草文、雲文、亀甲文等で裝飾されており中世五重塔として重要なものの一つである、庫裡は工事中で見学出来ず、昼食をとる。再び貸切バスで安国寺へ向う。曆応二年(一三三九)足利尊氏が国ごとに安国寺利生塔を建立した時、この寺を備後安国寺とした、一重の入母屋造り、本瓦葺き、唐様形式の手法をとり入れた室町期の禅寺としてすぐれている。木造阿弥陀如来及び両脇侍立像を見学、鎌倉時代に流行したいわゆる善光寺式如来で一光三尊形の巨大な船形光背を用いている。木造法灯国師座像等をも合わせて見学、徒歩で次の見学地沼名前神社を訪れ、仮設的な初期の能舞台等見学の後、鞆の浦に出て解散した。

(大久保幸作)

三十九年秋期史学科見学旅行記(行田・桶川方面)

十月二十三日、三田の図書館前に集合したが、生憎の雨模様で参加者は少い。清水、河北、江坂の諸先生はじめ二十三名。貸切りバスで行田へ向つたが、都内の道路混雑で意外に時が流れる。まず小見の真観寺古墳を見学。真観寺観音堂の裏手にあり、全長一〇〇米余、高さ五米ほどの小山のような前方後円墳で、後円部に二つの石室をもつ。いずれも緑泥片岩で造られており、一は高さ二米、奥行き五米位で、中ほどに前室後室を画したと思われる緑泥片岩の凸起がみられ、その奥部の壁際には溝が作られていた。一は高さ一米、奥行き三米ほどの小さなもので、かगんでもぐり込むと、暗く冷えびえとして、天井から雨滴がしたり落ちる。懐中電灯で照らしながらの清水先生の御説明をうかがう。

つづいて、埼玉神社境内の考古館へ、田島宮司の御厚意の麦湯を戴いて体を暖めてから、將軍塚の出土品を中心とした土師器・須恵器、埴輪、金銅製碗、馬具など多く古墳時代後期の代表的なものが陳列されているのを見学する。雨が降りしきるため、丸墓山、二子山古墳を含む関東最大の古墳群の個々については、清水先生の御説明で遠望するにとどめたが、心残りがする。

帰路途中で、桶川町川田谷の泉福寺を訪れる。住職清水、郷土史家青木氏らの御案内で早速阿弥陀三尊像を拝観した。本尊は寄木造